

四 ブラジルから来た日系移民との共生

エスココーラ・モモタロウ・オカヤマというブラジル人の子ども達のための学校で数年間ボランティア活動をしてきた。日本語が十分理解できない子どもがいて日本の学童に比べ学力も遅れがちになり、不登校になる子供もいた。勉強が好きになり、学校が楽しい場所であることが分かるように心がけ、日本の文化や日本人の生活を理解するための教材を選んで、毎週一回ブラジル人学校に通った。同時に移民に対する歓待の心も忘れなかった。

義務教育というのは、本人に教育を受ける義務があるのであるが、保護者も受けさせる義務を持つ。同時に、国（教育委員会）や学校も児童生徒の教育に義務と責任を持つということである。ところが外国人に対してはこれを適用しない。だから子どもが不登校になっても、家庭訪問をしてまで子どもに救いの手を差し伸べない。日本社会が在日の日系人を歓待しようとすれば、子どもの教育環境を国レベルで改善していかねばならない。例えば秀吉が行なったような国レベルの大茶会を開いて（学校教育法などを整備して）移民を歓待しなければならないが、今のところ、虹の架け橋教室事業など微調整にとどまっている。私たちの手の届く範囲で、少人数を相手に茶の湯の精神で接することが最も望ましいように思われる。

日系ブラジル人は一般に日本社会にトマトスープのように溶け込むことを欲していない。何年か働いて財を貯えた後は、ブラジルに帰国することを望んでいる。だから、子ども達はポルトガル語を忘れないように、むしろその能力が上達するように学校ではポルトガル語の授業に熱心である。大人達はブラジルに帰国した後何をするか、経済的社会的活動についての研究会に興味を持つ。日本に永住したいと考える人は少数派である。

日系ブラジル人は日本の産業活動に大変貢献している。彼等は日本語に通じないため苦労をし、住宅問題で苦労をし、子どもの教育を含めた日常生活で苦労している。こうした三重苦が、万一日本および日本人に対してマイナスのイメージを与えているとすれば、彼等を歓待することについて今一度再考しなければならない。

五 結びに代えて

社交性の美德を發揮して移民を歓待することは多くの日系ブラジル人と接している中で益々重要なことであるように思われてきた。最初、茶の湯は茶室の中の出来事と考えていたが、大自然の美を路地や庭や茶花に移し変えて、小さな茶室に広い宇宙を創りだしている。その中で営まれる茶の湯は日本人が長年培ってきた社交性の美德を凝縮させたものであろう。茶の湯の精神が、国際交流や外国人との交際に活用されてよいと考える。

参考文献

1. カント著 宇都宮芳明訳（初出一七九五年 増補版一七九六年）『永久平和のために』岩波文庫
二〇〇七年
2. Cohen, Robin, *Mirgration and its Enemies*, University of Warwick, UK, 2006
3. 堀内議司男著 「男子の茶の湯ことはじめ」原書房 二〇〇四年